

光の海を継ぐ

山口県漁業協同組合光支店
茂呂居 諭

1. 地域の概要

私の住んでいる光市は、山口県の東部に位置し、人口5万2,000人で、瀬戸内の温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれており、室積海岸、虹ヶ浜海岸や象鼻ヶ岬など風光明媚な海岸線に特徴がある。光市の漁業地区は、市場と支店のある室積地区と、西野浜地区と、私が住んでいる戸仲地区の大きく3地区に分かれている。



2. 漁業の概要

私の所属する山口県漁業協同組合光支店（以下「光支店」という。）の平成26年度の正組合員数は39人、水揚金額は、8,240万円、水揚量は134トンで、主な漁業種類は、小型底曳網、建網、一本釣り、たこつぼ漁業である。

3. 研究グループの組織と運営

光支店は、昭和24年に光漁業協同組合として発足し、平成17年の大規模合併を経て、山口県漁業協同組合光支店となり現在に至っている。

4. 実践活動の取組課題選定の動機

光支店では、組合員の高齢化や減少に伴い、水揚量、水揚金額とも減少し続けていたこともあり、平成21年度から、国や県の漁業研修支援制度等を導入して、漁業後継者育成に取り組んだ。それを受けて漁業者となった、新規漁業就業者（以下「ニューフィッシャー」という）である私の視点から、後継者の定着につながったと感じている光支店の取り組みについて発表する。

5. 実践活動状況及び成果

【実践活動状況】

私は、群馬県出身の37歳で、妻と子供3人の5人家族である。以前に勤めていた会社では、朝早く家を出て、夜遅くまで働き、家には寝に帰るだけで、家族とも顔を合わせる事のないような生活を送っており、転職も考えるようになっていた。

そのような中、インターネットで、「漁師ドット jp」というホームページと出会い、さまざまな地域の漁業の求人情報が紹介されているのを見て、「漁師になろう」と考えた。

その時は、住んでいた関東近辺での募集は、乗組員の雇用型ばかりで、独立型の募集をしていたのは、山口県だけであった。さらに、山口県は他県と比較して、研修や支援の制度がかなり充実していると感じた。どうせ転職するのなら、今までのように人に使われる立場より、自分の力で独立して漁業をしたいと考え、山口県のエントリーシートに記入した。

こうしてニューフィッシャーとして、平成23年度から研修を受けることになった。最初の1年は、家族を埼玉に残し、単身赴任で研修を受けた。研修2年目には、戸仲地区に一軒家を借りて、家族を呼び寄せ、一緒に暮らせるようになった。

光支店は、平成21年度に2人、23年度に私を含めて3人、24年度に2人の研修生を連続して受け入れていた。

私は、同期の1人と一緒に、小型底曳網の研修を受けた。一緒に受けることで、比較されるため、ライバル心で頑張り、また、いろいろと悩みなども話せる、良き相談相手となった。

入った年度は前後するが、ほぼ同世代の同じ立場の研修生が何人もいたことは、いろいろな面で心強かった。

複数の研修生を一度に受け入れることは、研修を受ける側からするとたいへん良かったと思っている。

師匠については、一対一ではなく、複数の師匠に交代で習った。これは、人によって違った技術や方法などを習うことができる点と、人が代わることで気分転換にもなる点で、良かったと思っている。

光支店のニューフィッシャー

平成21年度:2人



平成23年度:3人



私



平成24年度:2人



研修ローテーションイメージ図



現在、戸仲地区にはニューフィッシャーとして、私の他に2人の計3人がいて、多少のシケでも3人そろって沖に出ている。沖では、操業のライバルであり、情報を共有できる同志であり、トラブルがあった時には助け合える仲間となっている。

私は現在、11月から3月まで、小型底曳3種桁網のマンガン漁、4月から10月は素潜り漁をメインに行っている。ヒラメの漁があるときは、4月に2種小型底曳網をおこなうこともある。また、昨年、船と漁具を手に入れたので、今後、建網やかご漁業も時期に応じて行っていく考えである。

実は、私が独立した平成25年までは、光支店では素潜り漁が全面的に禁止されていた。かつて建網でサザエ、アワビを獲る方がいたこともあり、素潜りでのサザエ、アワビ漁は長年にわたって禁止されていた。

ところが高齢化や組合員の減少により、この10何年かは、磯根資源を利用する者もなく、海が空いた状態となっていた。

平成26年3月、光支店内での地先漁業の操業ルールを決める会議において、7人となっていたニューフィッシャーからの要望として、素潜り漁の解禁が議題として挙げられた。

会議の中で、「若い者が生活するために、素潜り漁を認めてやるべきだ」との意見もあって、最終的に平成26年4月の運営委員会の決定を受けて、翌5月から10月までの期間で素潜り漁が全面的に解禁され、光の海で素潜り漁ができるようになった。現在は、4月から10月の期間で素潜り漁が認められている。

今では、素潜り漁は大きな収入の柱となっている。特に、夏場の2種小型底曳網だけでは、思うような収入にならない状況があり、素潜り漁がなかった場合を考えると、素潜り漁を解禁してもらえたことは、独立したばかりで収入が安定しないニューフィッシャーにとって、とてもありがたいことであった。

現在の海の状況では、切り替えができる漁業を何通りか持っておいて、その時その時の状況に合わせて選択できるようにすべきと思う。

光支店での取り組みについて、私自身が漁師として定着できたと感じている点をまとめてみると、
(1) 近い年度に研修生をまとめて受け入れた点

① 複数師匠・複数研修生によるローテーション体制

研修の体制として、複数師匠、複数研修生によるローテーションが成り立ち、色々な技術が覚えられ、また師匠が代わることにより、気分転換できたことも、研修の継続につながった。

② 研修中に競争相手となる仲間がいること

研修中、仲間がいることは心強く、ライバルとして励みになった。また、ほぼ同世代の同じ立場の研修生が何人もいたことは、いろいろな面で心強いことであった。

③ 独立後の操業仲間ができる

独立してからは、沖と一緒に出る仲間が何人かいることは、操業のライバルとして、また何かあった際に助け合える心強い味方となっている。

(2) ニューフィッシャーの生活基盤を支える核となる漁業種類を複数用意した点。

① 素潜り漁の解禁

もっとも高く評価できることは、手堅い収入がある素潜り漁を解禁してもらえたことである。

② 複数漁業種の導入

マンガン漁、素潜り漁、2種底曳網や籠などを組み合わせて状況に合わせて切り替えることで収入を安定させることができる。

【実践活動の成果】

ニューフィッシャーが定着することで、支店の状況も変わりつつある。

図1は、光支店における、ここ10年間の正組合員数と水揚金額の推移を示している。組合員の減少にともなって、水揚金額も減少してきた。

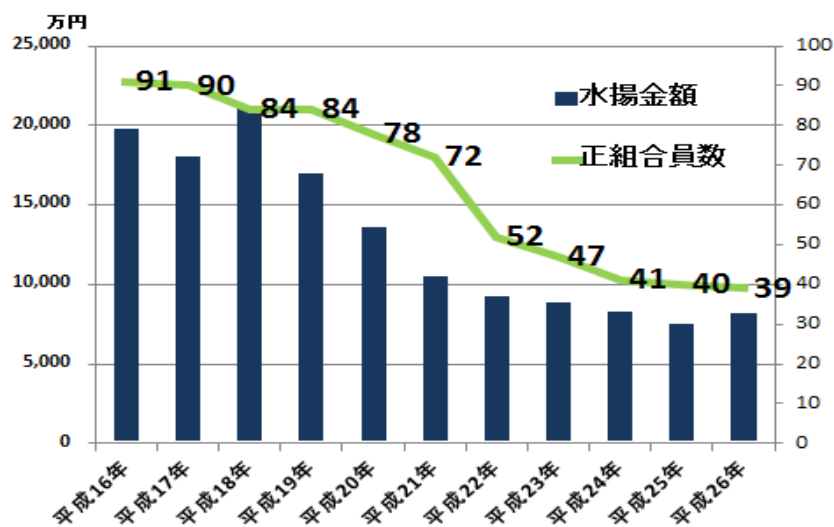


図1 光支店における正組合員数および水揚金額の推移

【成果1】

平成18年度には84人いた正組合員が、平成22年度には52人に減少した。しかし、平成23年度から、研修を終えたニューフィッシャーが正組合員として加わってきており、平成26年度には、ニューフィッシャー7人で全体の18%となり、正組合員数の減少に歯止めを掛けている。(図2)

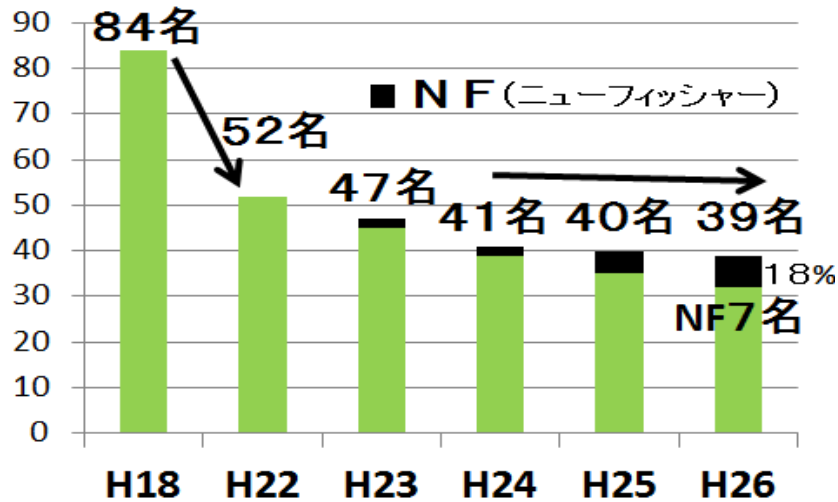


図2 光支店における正組合員数の推移

【成果2】

平成18年度には約2億1,000万円あった水揚金額が、平成22年度には約9,200万円と半減している。しかし、こちらも平成23年度からニューフィッシャーの水揚げが加わってきており、平成25年度の約7,500万円から、平成26年には約8,200万円になり、平成18年度以来、初めて支店全体の水揚金額が増加に転じている。平成26年度のニューフィッシャー7人の水揚金額は、約2,100万円で、支店全体の水揚金額の25%を占めている。(図3)

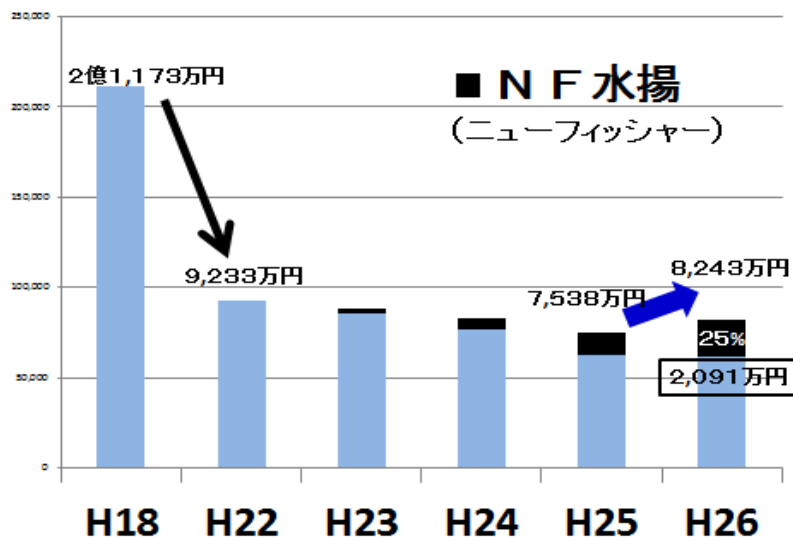


図3 光支店における水揚金額の推移

【成果3】

正組員の年齢組成は高齢化しているものの、ここにニューフィッシャー7人が加わってくることで、少ないながらも世代の隙間を埋めている。(図4)

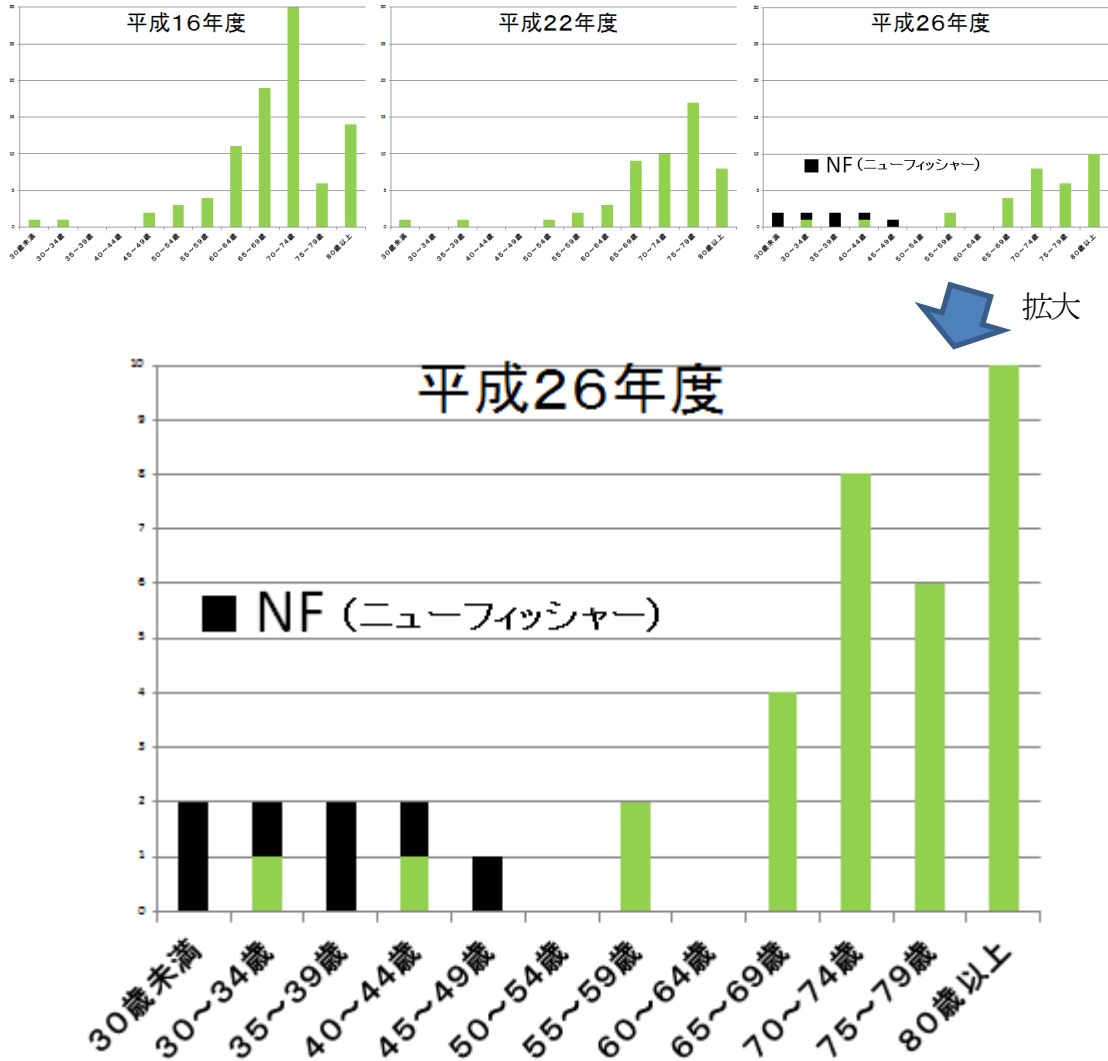


図4 光支店における正組員の年齢組成の推移

6. 波及効果

光支店では、現在も研修生を受け入れており、後継者育成を継続して行っている。

若い漁業後継者が多い漁業地区として、マスメディアの取材を受ける事も多い。また、県政広報用の取材を受けたこともあり、ニューフィッシャー事業の成功事例として紹介されている。

山口県での漁業後継者育成の取り組みは、こういった広報活動や支援制度の拡充もあってか、年々就業希望者の増加につながっている。(図5)

また、複数師匠・複数研修生によるローテーション制度は、山口県内の他の地区でも実施され、研修生の定着に有効な手段として、行政サイドからも推奨されているとのことである。

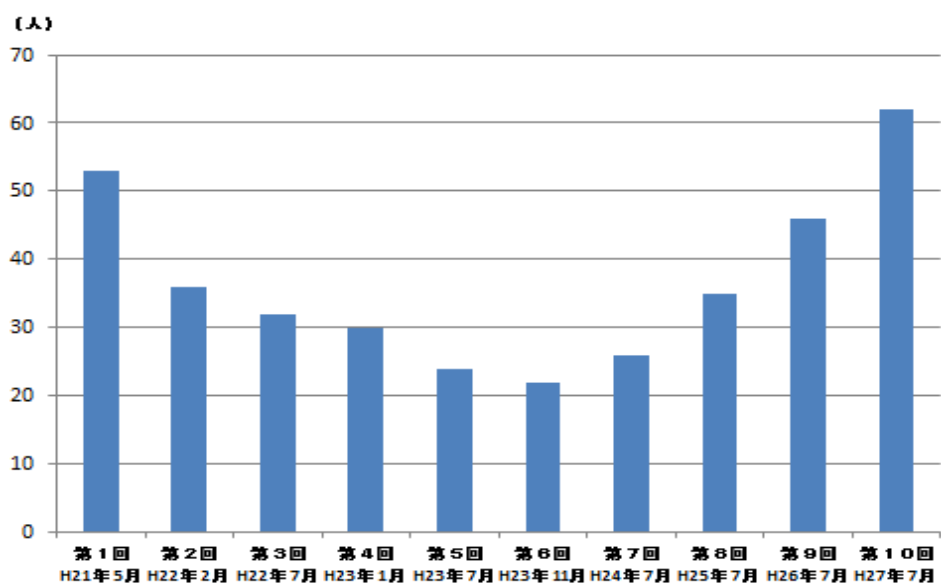


図5 山口県漁業就業支援フェアへの来場者数の推移

7. 今後の課題や計画と問題点

光支店においても、高齢化で師匠の成り手が減ってきている。今までニューフィッシャーに指導していた師匠の方々も新たに弟子に教えることが難しくなっている。世代はつないだが、昔のことを思えば、まだまだ人数の層は薄い状態である。今後は、私たちニューフィッシャーが師匠となって、次の世代につながる後継者を育てていく必要がある。

今年度から、光市がニューフィッシャーを軸とした活動として、「光市の水産業の第6次産業化推進協議会」を立ち上げ、勉強会を始めたところである。現在、独身のニューフィッシャーたちにお嫁さんがきて、奥さん方でグループができるようになったら、いずれは、自分たちの魚で、加工や販売に取り組みたいと思っている。